随想　なろうと思えばホームレスにもなれる豊かな国（日本）

～物質的豊かさと想像の貧困～

加藤　宏光

週刊誌ＳＡＰＩＯ（サピオ）に標題の記事が掲載された。リーマンショックが発生した昨年九月の時点では、わが国では一六年前のバブル崩壊の経験を教訓に金融産業の影響が世界で最も軽微であるとされた。それから半年ほどで、世界に冠たるトヨタやパナソニックをはじめ、錚々たる企業が赤字の予想を立てるに至って、世相は一変した。輸出を前提として成り立つ日本の経済にとって、製品の購入相手国に購買余力がなくなれば、販売を予定していた在庫が不良滞貨となるのは当然で、金融のみ傷が浅くても、不況が深刻化するのはいわば当然の帰結であった。しかし、ことがそうなるやいなや、マスコミはこぞって世界におけるわが国の位置付けはさも救い難いかのような悲観論で埋め尽くされるかのごとくとなった。

アメリカや中国の経済対策によって、日本経済にも底打ちの気配が見えるようになった昨今、かつてのような悲観的情報ばかりが流布されなくなったこの頃、前述の記事を見つけたものである。

以前、随想にとりあげたこともあった、非正規雇用者をはじめとする低所得者やホームレスについて、同情をしないわけではないが、彼らの主張になんとも言えない違和感を覚えることも否めない（マスコミの取り上げ方により強調されているかも知れぬが…）。

被害者でもない人たちを被害者として世論を掻き立てる情報にいささか食傷ぎみであったところへ『いいかげん自虐的国家観から脱出しよう－日本人で良かった』と銘打ったこの特集は、著者の気持ちを代弁してくれている。

今月の標題は日本財団特別顧問・日下公人氏のものである。彼は次の一〇条件のゆえに日本は国際的に優位である、と主張する。

①長寿
②安眠可能
③多い友人
④多い娯楽
⑤旨く安心な食品
⑥金持ちになれる
⑦詰め込み教育
⑧ホームレスになれる
⑨刑務所に入れる
⑩日本語ができるようになる

彼は主張の冒頭、『①以外には異論が多いだろうが…』と書き始めている。

十項目それぞれは視点をずらせば『然り』とうなずけるものが多い。たとえば、⑦の詰め込み教育にしても、こうした詰め込み教育システムのおかげで就学率が高くなり、その場で③多い友人を得ることに繋がるとしている。

刑務所にしても、日曜、祝日が休みで八時間労働、食事も栄養士がきっちり管理されている（だからこそ、老いて仕事を得られなくなった人があえて罪を犯して刑務所に入ろうとする）。皮肉にも刑務所の労働にはわが業界で働くより、ある意味恵まれた環境が与えられている。

テレビで紹介される以上の情報は知らないが、ブラジル等の国でのホームレス（ストリートチルドレン）の追い詰められた生活に比べ、わが国では、《街を離れたくない》がゆえに、あえて《ホームレスという生活スタイル》を選んでいる人が少なくないことを考えると、なろうと思えば《ホームレスにもなれる豊かな国》という日下氏の主張が皮肉でなく伝わってくる。

リーマンショック以前からエッグサイクルに苦しめられながら、資金を借り入れてまで歯を食いしばりながら労働を確保している養鶏業界としては、この風潮はある意味忌ま忌ましく感じるほどである。

同じ号（SAPIO）に曽野綾子氏の【水を飲んで寝るか、乞食か、盗むしかない、そんな「本当の貧困」を想像できない日本人の「幸福」】という記事が掲載されている。

氏は自身見てまわった一二三か国を

①政治的国家（他の国に政治力を及ぼしたいと考える国、アメリカ、中国、ロシア等＝親分国家）

②経済国家（経済的繁栄を第一とする国、シンガポール、スイス等＝商人国家）

③技術国家（日本、ドイツ等＝職人国家）

の三タイプに分けている。そして、氏は次のように続ける。

日本人は国際的にはみな〝小金もち〟で最も幸せな庶民である（邱永漢氏の著述より）。それを支えているのは、教育基盤の充実に基づく職人集団である。職人は忍耐と努力で誇れる物造りをする。また、水、電気はどこにも当たり前にある。この当たり前は他の国では当たり前ではない。

わが国へ流れてきたベトナムのボートピープルは収容施設で「飲める水で体を洗っていいのか。トイレまで流すのか!!」と驚いた。氏が赴いたコンゴでは、その日の水を蛇口から〝売られる〟のを、列をなして待つのを見たという。そして、こうした光景は世界では珍しいものではない、と付け加える。

氏によれば、電気が使える人は六五億人のうち四〇億人であり、いつもどこでも使える人は一握りである。

アフリカでは授乳によるエイズの母子感染が非常に多い。氏が地元の医師で代議士の女性に「粉ミルクを援助したら乳幼児を助けられる？」と尋ねたところ、答は否。

「エイズを防いでも、汚染水からの細菌性下痢で死ぬ」とのこと。水を沸かす薪は一束で一日の収入ほどもする。とてもミルクには使えない。

また、これらの国々では植民地の歴史のゆえに、自国語で学べない。自国語で学べることは、幸せなことである。

それらすべてを当たり前としている日本人も数十年まえには食べ物がなく、虱がたかる生活をしていたのに、現代の日本人は本当の貧困を知らない。氏はその原因を本を読まなくなったから、と断じている。それゆえの想像力の欠如によると……。

《今夜食べるモノがない》以外に貧困はない。そうした人は水を飲んで寝るか、乞食をするか、盗むしかない。日本は世界でも稀な幸福な国である。そうした中で恐怖、不幸を想像する力が知性である、と氏は力説している。

然り、と思いながらも、そうした環境でホームレスになり、盗み、そして簡単に人を殺す今の日本人が増えている気がして、そら恐ろしくなる。